

2008年度

07

学術の新しい風

号 ～見えないものを見るために～



New Research
Initiatives
in Humanities
and Social
Sciences



独立行政法人
日本学術振興会

人文・社会科学振興プロジェクト研究事業

New Research Initiatives in Humanities and Social Sciences

人社プロ・ニュースレター

巻頭エッセイ：

知的「ゆとり」を教える人文科学



吉岡 洋

所属：京都大学大学院文学研究科 教授

専攻：美学・芸術学

著書：『情報と生命』（新曜社）、『思想の現在形』（講談社）など。

私の専門は「美学・芸術学」である。そのように自己紹介しても、分野を異にする研究者の方々はピンとこない。美や芸術というものは、個々人がみずから感じ楽しむものであって、それらを大学で「研究」するなどといったことに何の意義があるのか？と思う人もいるだろう。あるいはまた次のように考える人もいるかもしれない。紛争や貧困、医療、環境など様々な現実的問題が山積している世界で、今どき「美学」「芸術学」とは、なんとまたのどかなことであろうか、と。

私はそうした見方に真っ向から反論したいとは思わない。そもそも「のどかさ」は、ある意味でどんな学問にとっても必要なものだと思っている。けれども美や芸術にかかわる議論や探究が、衣食住足りた幸福な人々のためだけの、たんなる「贅沢品」であると考えられているとしたら、そうした意見にはあくまでも反対したい。真に創造的な芸術家たちの多くが、衣食住はおろか時には命の危険すら冒して芸術の新たな可能性を探究してきたことは、歴史が示すとおりである。

合理的に考えれば、実生活の安寧や幸福を犠牲にしてまで美的な理想を追求するなどということは、まったく狂気の沙汰である。ゴッホは過去の「天才」だから、私たちは彼のエピソードを安心して、時には感動とともに聞いていられるが、もしも自分の周囲にゴッホのような存在が現実に現れたとしたら、たぶん私たちのほとんどは、こんな危険人物はしかるべき施設に早く隔離してくれと叫び出していたに違いない。

美学・芸術学として一括りにされる分野には、様々に異なった研究方法が存在している。それらを通底する共通の前提があるとすれば、それは〈人間とは合理的存在ではない〉という基本認識ではないかと私は思う。あるいは、人間存在は根源的な過剰性に貫かれているという認識である、といってもいい。私たちは快適さ、幸福、進歩といったポジティブな価値を合理的に求める反面、心の底には、それらを全否定するような何かしら未知なもの、途方もないもの、しばしば無意味さや破壊として現れざるをえないものへと向かう、理不尽な衝動が潜んでいるのである。

文学や芸術の研究が重要である本質的な理由は、人間がそもそも、こうした非合理で過剰な本性を持つ存在だからである。そして、こうした洞察を知識へと高めるには、通常の「科学」や「研究」という制度的枠組みだけではなく、それを越えたある知的「ゆとり」をもたなければならない。さもなければ、いかに精緻な分析や調査を重ねても文学や芸術をとらえることはできない。この「ゆとり」を教えるからこそ、人文科学研究はまさに現代にとってこそ必要な営みなのである。

「若手の会」成果本 『＜境界＞の今をたどる』出版にあたって

「若手の会」は、人文・社会科学振興プロジェクト研究事業の諸領域に所属していた大学院生や駆け出しの研究者たちによる緩やかな共同研究体だ。もとより多分野協働の性格が強い人社プロの諸プロジェクトから参集した若手の会メンバーの間には、当初、偶然的な関心の重なり以上のつながりを見出すことは難しかった。それでも、メンバーが集まって互いに報告を聞き、合宿をして議論しあう5年間を過ごしてきた。

今、私たちの間には確固としたつながりがある。今回、「若手の会」の総括として出版される論文集のテーマ、「境界」は、この5年間で培われた私たちのつながりを示すキー・ワードの一つだ。ある面では、「若手の会」の活動自体が、メンバーそれぞれを梓づける関心・方法・ディシプリンという「境界」を、検討・解体・再構成することで、相互のつながりを作り出す試みであったといえるかもしれない。

本書の出版にあたって、私たちは執筆合宿を行い、互いに原稿を読みあい、視点を共有しながら、さらに議論を深めていった。本書は「若手の会」メンバーの今、この5年間の到達点であり、今後に向けての始点を示している。本書によって、「若手の会」の活動の一端でもお伝えすることができれば幸いである。また、本書に目を通された先輩研究者諸兄から、私たちの今後に向けてのアドバイスなどいただけるなら、これに勝る喜びはない。

柴田 晃芳（北海学園大学 非常勤講師）

「若手の会」長崎合宿研究会： 他分野に語る、他分野の眼で見る

2009年1月24日～26日の3日間に渡り、若手の会メンバー10名および外部ゲスト1名で、長崎にて合宿を行いました。今回は本会としては最後の合宿ということで「分野を超えた研究者の協働（コラボレーション）：他分野に語る、他分野の眼で見る」をテーマとしました。具体的には、各々のディシプリン（政治学、地域研究、文化人類学、宗教学、建築史学、心理学、生命倫理学）の研究の方法論についてのレクチャーを行い、討議を行いました。また、他分野の研究者の眼現場を見る見方を学ぶために、建築史学と宗教学のメンバーを中心に、長崎市内の宗教的建造物をめぐるフィールドワークを行いました。フィールドワークに先立ち、まず長崎市の模型づくりの作業を行いました。地図の細かな等高線に眼をしばたかかせながら印をつけ、カッターでボードを切る作業を経て、最終的に出来上がった模型にはメンバー全員から感嘆の声！短い時間の作業ではありましたが、メンバー全員が「協働」のプロセスを、身をもって経験することができたように思います。

今尾 真弓（名古屋大学 非常勤講師）



若手の会主催 第4回 若手フォーラムの開催について

去る8月23日(土)、東京大学駒場キャンパスで、若手の会主催による『文化の社会的受容と文化的マイノリティとしての社会的地位の確立』と題した若手フォーラムが開催された。若手フォーラムは2006年度に第1回が行われ、今回はその第4回目となる。今回は、ある文化が社会に受け入れられる過程を多分野領域の若手研究者たちが各自のフィールドを持ち寄って、分野横断的な検討を試みた。第1報告者である岩崎真紀氏(筑波大学北アフリカ研究センター)は、イスラーム社会におけるもう一つの宗教—エジプトのコプト・キリスト教復興運動を宗教学の立場から考察し、コプト復興の動向をイスラーム社会の復興との対比により、コプトがコプトとして生きる文化の有様を報告した。第2報告者の脇田裕正氏(東京大学)は、文学の立場から、大槻憲二と岩倉具栄の2人を軸に1930-40年代の日本における英文学と精神分析との関係について報告した。文学の中で精神分析が注目された過程を先の実験者たちを中心に議論した。これらの報告をふまえて、歴史学の立場から川喜田敦子氏(東京大学)、心理学の立場から今尾真弓氏(名古屋大学医学部)、社会学の立場から松川太一氏(総合地球環境学研究所)が各々の学問領域から指定討論を行った。会場には多分野領域の研究者が集まり、本企画のキーワードである「文化の社会的受容」についても領域の枠を越える白熱した議論が展開された。

福田 茉莉(岡山大学 大学院生)



お詫びと訂正

事務局のミスにより、人社ニューズレター第6号(6ページ)における「他人事ではない世界の紛争」(黒木英充先生)の記事内容を誤って配信しておりました。お詫び申し上げますとともに、以下に訂正後の文章を記載いたします。

【黒木先生訂正記事】

他人事ではない世界の紛争

黒木 英充 東京外国語大学 教授

中東は国際政治の矛盾が凝縮し、人間の安全が著しく脅かされている地域だ。その中東に、日本の石油エネルギー資源の8割以上を依存している。中東の問題はそのまま日本にはね返ることを自覚するべきだ。なかでもレバノンには人口400万程度の小国ながら中東の縮図である。政治的には親米派と反米派に分かれるが、これは単にアメリカを好きか嫌いかという問題ではなく、民主化や一方的戦争、まさに人間の安全をめぐる深刻な内部対立なのだ。世界を見る際には、意識的に生活実感と世界政治を結び付けるように五感を研ぎ澄ますことが大事で、その際には言葉に関する感覚が決定的に重要になる。私たちは「テロ」という言葉一つですべてわかった気になっていて、実際にはなぜその暴力が生まれてきたのか、何もわかっていない。すべてを問い直す批判精神を養うことが肝要だ。

グッバイ人社プロ！ グッバイニュースレター！



サトウタツヤ

所属：立命館大学文学部教授
専攻：社会心理学、心理学史
著書：人社プロに関連した著書として、
城山英明・小長谷有紀・佐藤達哉 編集 2005 「クリニカル・ガバナンス」現代のエスプリ458号（2005, 至文堂）など。

New Research Initiatives in Humanities and Social Sciences

人社プロ・ニュースレター

ニュースレター最終号にあたり本事業に関わったプロジェクトリーダーとして、また編集委員長として雑感を書いてみたい。個人的には、本当に多くの優れた研究者の方々と知己を得たことが最上の喜びである。私は心理学という辺縁領域にいたこともあってか、この事業に参加する前に知り合いだった人は誰もいなかったのだ。次ページにニュースレター総目次を載せているが、この方々だけでも錚々たるメンバーである。

本事業の評価自体は第三者に委ねるしかないが、この事業では5年間にわたって継続的に各分野の優れた研究者によるネットワークが（表面上だけではなく）緊密に維持されており、化学反応が起きるように様々な知識が生産され、多くの社会提言がなされたのは疑いのないところである。サイエンスカフェ（津々浦々学びの座）などの情報発信事業も数多く行われた。

なぜなのか？順不同で考えていく。第一に、問題の共有を行うだけの「学際（インター・ディシプリナリ）」ではなく、課題解決の共有を行う「学融（トランス・ディシプリナリ）」を目指したこと、またそれが社会提言という形に結びつくという理解が共有されていたことである。公募を通じて集まったモチベーションの高い集団が共通の目標を持っていた。第二に、メンバーが一同に会する機会が多く設定され、その場に多くの方が実際に集まったこと。メール全盛の世ではあるが、直接会合を持つ意味を改めて感じさせてくれた。時にはある問題についてグループワークをすることもあった。学範（ディシプリン）をこえた研究者同士で行うワークは知的な興奮を与えてくれた。第三に、理系領域の方が1/3ほど参加していたこと。現在の世界では、自然科学や工学を抜きにしては社会が成り立たない。人社系主導で、社会と科学技術・医療・建築・環境のような問題を考えたため、理系主導とは異なる議論が実現した。第5領域で芸術と科学技術の結びつきが扱っていたことも興味深かった。最後に、企画委員会及び事業委員会のリーダーシップ。とかく一匹狼が多い研究者たちを研究内容について縛ることなく、しかし、タコツボに入らないようにとうまくガイドしていたように思われた。

「科研費は個人に与えられ、GCOE 研究費は大学（拠点）に与えられるが、人社プロ研究費はネットワークに与えられる」であるとか「学融合は核融合のように難しい。だからこそ、やりがいがある」というキャッチフレーズが思い出される。

人社プロのネットワークは、学融合や社会提言を目指してゆるやかにつながっており、今ここで崩壊することはない。本号に紹介されている若手の会の参加者も含め、今から10年15年後には、本事業に参加した学者たちのネットワークとそこから生み出される業績が人文社会科学領域で揺るぎないものになるだろう。「この研究者とあの研究者、分野は違うけど、実は人社プロ出身なんだ！だから面白い研究してるんだ！」なんてことが数多く生じるのではないだろうか。そういう未来を信じて、また、多くの皆様のご支援ご理解に対する感謝の意をこめて、最終号を届けたい。

【人社ニューズレター総目次】

<p>第1号</p> <p>巻頭エッセイ：「人社プロジェクトの仕掛け—研究ガバナンスの試み」（城山英明）</p> <p>プロジェクト紹介：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. グローバル化時代のハウスホールド=家庭ガバナンス 2. 国際河川を巡る流域国間の確執と協調 <p>対談：「社会における芸術と科学」 岡田暁生×平川秀幸</p> <p>編集雑記</p> <p>人社キーワード：「失われた10年」</p> <p>自著を語る：『日本政治変動の30年』</p> <p>活動報告1：ミュージアムに未来はあるか</p> <p>活動報告2：06年サマースクール</p> <p>活動報告3：フィールドワークショップ食育</p> <p>風を受け、舵を取れ シリーズ・人社の若手たち： ルイ・ヴィトンを持つおバカさん</p> <p>公開セミナーのおしらせ：「昔話に見る未来」</p>	<p>第2号</p> <p>巻頭エッセイ：「出会いだけが学問（人生）だ」（沼野充義）</p> <p>対談：「安心・安全・安楽とまちづくり」村松伸×桑子敏雄</p> <p>プロジェクト紹介：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 阪神大震災から12年、「ふつうに戻った社会」のなかで… 2. デジタル時代のアナログ・データの必要性 <p>活動報告1：若手の会の活動報告</p> <p>活動報告2：「イノチのゆらぎとゆらめき」シンポジウム</p> <p>編集雑記</p> <p>風を受け、舵をとれ シリーズ・人社の若手たち： ドイツの教科書研究所の風景／</p> <p>自著を語る：『大正期新興美術資料集成』</p> <p>人社キーワード：「科学技術の軍民転用」</p> <p>告知：「飛び出す人文・社会科学～津々浦々学びの座～」</p>
<p>第3号</p> <p>巻頭エッセイ：「共同研究と社会提言」（沖大幹）</p> <p>対談：「医療システムと倫理」 清水哲郎×吉田あつし</p> <p>プロジェクト紹介：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 産む・産まない・産めない 2. モンゴル帝国時代のカルテ <p>活動報告：1 『市場』を使いこなすために</p> <p>活動報告：2 第5領域横断フォーラム「誘惑と越境 第1部」</p> <p>風を受け、舵をとれ シリーズ・人社の若手たち： どのような未来を望むのか</p> <p>自著を語る：『動物実験の生命倫理—個体倫理から分子倫理へ—』</p> <p>人社キーワード：「分配的公正」</p> <p>芸術ナビ：映画『Song Catcher ～歌追い人』</p> <p>未来を拓く人文・社会科学：シリーズ刊行開始</p> <p>編集後記</p>	<p>第4号</p> <p>巻頭エッセイ：教育について語ること：「専門知識と社会の壁」（荻谷剛彦）</p> <p>対談：「大学教育から見た教育の再構築」 葛西康德×青島矢一</p> <p>プロジェクト紹介</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 貧困格差グループの研究内容 2. 二つの国際シンポジウムを終えて <p>活動報告：SIMPATIA という試み</p> <p>風を受け、舵をとれ シリーズ・人社の若手たち： ナイルの水を飲んだ者は…</p> <p>自著を語る：『指定管理者制度—文化的公共性を支えるのは誰か』</p> <p>人社キーワード：「環境美学」</p> <p>芸術ナビ：『俺のことを合法化してくれ!』～ジプシー・パンク“ゴーゴル・ボルデロ”～</p> <p>編集後記</p> <p>人社プロ・最終シンポのお知らせ</p>
<p>第5号</p> <p>巻頭エッセイ：「アメリカ研究」の再編（古矢旬）</p> <p>プロジェクト紹介</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 資源配分の「効果」を問う 2. 「多元的共生」の国際比較 3. 帝国とネットワーク <p>風を受け、舵をとれ シリーズ・人社の若手たち： 語りをつなぐ媒介者としての研究者へ</p> <p>人社キーワード：「逸品」ものづくり経営塾という提案</p> <p>人社キーワード：リーダーシップ閑談</p> <p>自著を語る：人社本紹介</p> <p>前号の訂正／編集後記</p> <p>シンポジウム特集</p> <p>院生の視点から／企画者の視点から／シンポジウム特集～概要～</p>	<p>第6号</p> <p>シンポジウム「人生を楽しくデザインしよう！」</p> <p>冒頭の挨拶</p> <p>シンポジウム第1セッション【家族】</p> <p>シンポジウム第2セッション【学びと仕事】</p> <p>編集後記</p> <p>シンポジウム第3セッション【世界とつながる生活】</p> <p>巻末エッセイ（小長谷有紀）</p>

人社キーワード：

人間の安全保障学

「人間の安全保障」は、1994年に国連開発計画が打ち出した概念で、従来の「国家の安全保障」ではカバーしきれない個々の人間の安全に注目し、恐怖と貧困からの自由を目標に、「人間開発」などを掲げる政策を支えてきた。国連だけでなく日本も含めた諸国政府もこれを推進してきたが、その過程で「人間の安全保障」は「国家の安全保障」を補完するものだ、との了解が共有されてきた。「人間の安全保障学」は、これに批判的な立場から、「人間」と「国家」のそれぞれの安全保障の現実が対立する局面こそが現代世界における最重要な問題だととらえる。そして国家という枠自体も相対化して、個人、社会組織、宗教宗派、民族集団、国家、地球社会など、あらゆる局面で成立しうる重層的な「地域」を設定し、それぞれの社会的・歴史的・環境学的文脈のなかで「人間の安全」を総合的に把握することを目指す、諸学の共同作業として構想された。

黒木 英充（東京外国語大学 教授）

人社本紹介：

未来を拓く人文・社会科学シリーズ No.5

『水をめぐるガバナンス—日本、アジア、中東、ヨーロッパの現場から』 蔵治 光一郎（東京大学 講師）

21世紀の地球にとって地球温暖化とともに最も重要な環境問題の一つであり、洞爺湖サミットでも主要な議題の一つとなる「水問題」の解決には、科学技術の進歩に加えて「新たな水の秩序の形成」（ガバナンス）が不可欠です。本書は日本と世界の水問題の解決に向けて新しい水のガバナンスを確立しようとする試みを、フィールド研究者の視点から日本や世界の豊富な事例を示しつつ解説しています。これまでの人類の歴史の中で、水不足や水災害をめぐる争いは絶えず、調停や裁定が繰り返され、「地域の秩序」（ローカル・ガバナンス）が形成されてきました。大規模な土木工事によって水資源が開発され、水害は減り、水争いは沈静化してきましたが、水への人々の関心は薄れてしまいました。しかしどんなに科学技術が進歩しようとも、水不足や水災害を完全に制御することはできません。本書をきっかけとして水問題への関心が少しでも高まることを願っています。

蔵治 光一郎（東京大学 講師）



飛び出す人文・社会科学～津々浦々学びの座～報告

平成20年度人文・社会科学振興プロジェクト研究事業「飛び出す人文・社会科学～津々浦々学びの座～」の一環として、平成20年11月22日（土）和歌山市の和歌山ビッグ愛にて「難病を抱えながら生きる～不動の身体からの経験知～」が行われた。運動神経が冒され、筋肉が動かなくなっていく病氣と戦っているALS患者さん、「ボトムアップ人間関係論の構築」グループの研究者、そして地域のみなさんとで、難病を抱えて生きるこの意味や経験・社会作りについて話しあった。私たちは、自分の身体の状態を一般的に、病氣なのか健康であるのかと



いった観点に二分して捉えてしまいがちである。しかし、難病を抱えながら生きる人たちと接して理解されることは、身体とは決して白か黒かといったような状態区分で捉えられるのではなく、病（やまい）を内包した身体が時にその発現を許し、またある時期には病が後ろ側に隠れるなかで、常に揺れ動きを伴った「一つの身体」として存在しているということである。人生においては、病というものを嫌悪して離れていこうとするのではなく、病とともに上手に歩むことが自然であるといったことを、参加者の誰もが患者さんたちの生き方を目にする中で学ぶことができた。

水月 昭道（立命館大学 研究員）

シンポジウム開催のお知らせ

人文・社会科学振興プロジェクト研究事業の第V領域が中心となるシンポジウムを開催します。本シンポジウムでは、「芸術は誰のものか?」と題して、現代社会における芸術をめぐるさまざまな問題に正面から向き合い、芸術と越境、芸術と国家、芸術の使命といったテーマに即して、専門領域を超えた知の出会いと対話の場を作りだすことを目指します。そして、21世紀における芸術のあり方や、芸術に関する社会政策について具体的な提言を試みると同時に、人文・社会科学の未来について新しい方向性を示したいと考えています。

日時：2009年3月7日（土）10:30～18:30

会場：KOKUYO ホール（東京都港区港南1-8-35）

定員：300名（参加にはインターネットによる事前申込が必要です。）

<https://blue.tricorn.net/jinsha/f.x?f=a1293d95>

プログラム：

10:30-10:40 開会

10:40-12:05 【芸術は何を超えていくのか?】

13:15-14:40 【芸術と国家】

15:10-16:35 【芸術は何のためにあるのか?】

16:35-17:05 【アンケート・アート上映】

17:05-18:30 【総合討論】

なお、詳細はホームページでご覧いただけます。

http://www.jsps.go.jp/jinsha/01_sympo_h210307.html

編集後記

最終号、若手の会の特集のような形になりました。院生・助教レベルでの学融経験が今後に花を咲かせることを楽しみにしています。（編集長 s）

第一号では学部学生だった私も今では立派な(?)院生になりました。時にはいろんな先生にお会いできて嬉しかったり、時にはミスして慌てたり。実に充実した時間を過ごさせていただきました。ありがとうございました。（編集見習い h）

人社プロジェクトも今年度で終了です。関係者には多大なるご理解とご協力をいただき、大変感謝しております。本事業でのネットワークが継続され、人文・社会科学の発展に資することができれば光栄に思います。（事務局 o）

◎ 目次

巻頭エッセイ：知的「ゆとり」を教える人文科学	1
風を受け、舵をとれ シリーズ・人社の若手たち：『若手の会』成果本『〈境界〉の今をたどる』出版にあたって	
／「若手の会」長崎高宿研究会：他分野に語る、他分野の眼で見る	2
若手の会主催 第4回 若手フォーラムの開催について／お詫びと訂正	3
グッバイ人社プロ！ グッバイニューズレター！	4
人社ニューズレター総目次	5
人社キーワード／人社本紹介／人社サイエンスカフェ実践報告	6
シンポジウム開催のお知らせ／編集後記／目次	7

○編集：「学術の新しい風」編集委員会

編集長：サトウタツヤ（立命館大学・教授）
第3領域の「ボトムアップ人間関係論の構築」
グループリーダー

編集担当：日高友郎（立命館大学・学生）

デザイン：三村豊（東京大学生産技術研究所・学生）

事務局：井原、小笠原（日本学術振興会研究事業課企画係）

○発行：独立行政法人 日本学術振興会
研究事業部研究事業課

人文・社会科学振興プロジェクト研究事業担当

住所：〒102-8472 東京都千代田区一番町8（FSビル7階）

電話：03-3263-4645

Email：jinsha@jsps.go.jp

<http://www.jsps.go.jp/jinsha/>

○印刷：株式会社 創造社

人間/
 わたくしのもの。ひとりひとりのもの。/ 作り手のものでもあるし、受け手のものでもある。(みんなのもの) / 自分。たぶん多くの人が自分のものって書くと思う。自分を満たすために芸術は生まれたと思う。/ 誰のものでもない/ みんなのもの、誰のものでもない/ 誰のものでもある。みんな芸術だと気づかずにいると思う。作ることはみんな芸術、アート!!! / 誰のものとかじゃなく、人間のもの。/ 私のもの。違います。Art = Art / 同じ価値観を持つ人どうしのもの。自分と他人をつなぐあいだ。/ 私のもの/ みんな/ イメージすることができる生き物のもの/ そんなかんがえたことないわ。誰のものとかない。みんなのもの。ていうか「もの」じゃないと思う。もっとオーラ的な空気のフェロモンの... / 芸術とは芸術に気づき興味をもっている人の物だと思います。/ 誰のものかわかりません。誰のためのものかというのなら、見る(聴く、さわる、感じる)人のため。他人でも、作った本人でも。/ 作った本人の物であり、この世に存在するすべての生物のもの。/ みんなのもの。/ 作品を見る人/ 作者/ 本来なら皆のものだけど、一部の金持ちや芸術をたしなむ人々によって、一般人には遠い世界のように感じてしまうもの。/ 自分自身/ 見たりしたりする他人/ 世界中のみんな/ 人間/ 自分のもの/ 当事者(見る人、作る人、展示する人など)、環境(場所、空間など) / 誰のものでもない/ 自分自身のもの・みんなのもの/ だれか/ すべての人のものだと思う。芸術に興味がないという人もいますが、人の生活には芸術があふれていて、芸術なしでは人は楽しく生きていけないと思うから。/ それを芸術だと考える人のもの。/ つくる本人が「これは芸術だ」と思っていることはそうないと思うので... / 自分・みんな・人間だけのもの・制作者/ 誰かものっていう訳じゃないけど、芸術に関心のない人が見ても意味がない気がします。/ そういった固定観念はないと思う。質問自体の意味もよくわからない。芸術というのは、それを意識したもの全てにあると思う/ みんなのものです。/ 芸術作品の多くは人に見せることを目的に作られているため、作者のものでもありそれを見る人のものでもある/ だれのものでも良いと思います、興味があれば/ 自分/ 制作者、作品を見てくれる人は全員、パトロン、作品と対話して共感してくれる人/ 必要だと思う人すべてのもの? / だれのものでもないみんなのもの/ 自分自身のもの、見る人すべてのもの/ 自分自身のもの/ 芸術は自分のものだと思う人のためのもの。みんなのもの。/ 自分とそれを見てる人のもの/ 作った人や事柄、それを感じとる人。美術館。

(美術系大学生60名へのアンケート)



人文・社会科学振興プロジェクト研究事業シンポジウム

「芸術は誰のものか？」

平成21年3月7日(土) 10:30 - 18:30 開場10:00

- 会場 KOKUYOホール(東京都港区港南1-8-35)
- 定員 300名(先着順) 参加費無料
- 主催 独立行政法人日本学術振興会

参加登録・詳細はHPをご覧ください。
 参加には事前登録が必要です。
<http://www.jsps.go.jp/jinsha/>